

演習林の業務について ～就業3年目のまとめと次期管理計画樹立のための考察～

芦 原 誠 一
(農学部附属演習林)

1. はじめに

演習林で働きはじめて3年が経過する。仕事は木材の生産や保育作業(林業一般)、実習や研究等の支援など様々あり、これらを現場の職員が自律的に行わなければいけないことなどもわかってきた。

演習林の全体像をとらえなおすために日々の業務をふりかえってみた。ここではこれからの演習林のありかたを探るために自分なりにまとめてみたことを、業務紹介を兼ねて述べる。

2. 木材の生産

業務の中で重要なものが木材の生産である。演習林の収入はこれによって確保している。毎年1,000 m³弱を伐採して市場に出荷しているが、その生産量は管理計画(1996～2005年)に従って決めている。演習林全体を50m×50mメッシュに区切り(13,227区画)それぞれの区画の立地級の7段階評価から伐採の対象となる森林を特定しており、これらの森林の成長量から1年間に伐採可能な生産量を算出している。したがって生産量には限界がある。

3. さまざまな森林

演習林は研究者や学生の支援をするために様々なタイプの研究用のフィールドを用意しておくことが求められる。さらには対外的にアピールできる森づくりを進めなければ演習林の存在価値はないと考える。

現在さまざまなタイプの森林を保有しているが、それらは研究林という「点」としての存在であり、森林全体の取り扱い方針(施業方法)を決めて適用し、経営していくことが必要である。またこれまでの研究成果の整理と、データの蓄積継続も不可欠である。

【施業中のさまざまな森林の例】

- ・広葉樹造林地…広葉樹材は育林技術が確立していない。
例) イスノキ。特に九州に多く産するが過伐により数は少ない。森林を200年?ほど放置しておけば生えてくるが、これを100年で行えるようになればそれは立派な林業技術である。
- ・長伐期施業…台風常襲地である鹿児島にマッチする老齢人工林とは?
- ・複層林(樹下植栽)…下木に光が届く最適な上木の密度は?
- ・巻き枯らし試験地…間伐の一手法であると同時に、枯れ木の生態的効果も?
- ・不成績造林地
- ・疎植、密植造林地…通常3,000本/ha植えるが、1,000本や6,000本の場所はないか?

4. 演習林の全体像

○木材生産、保育作業(林道管理等も含む) = 原動力 / 電池

現在の演習林を動かしている原動力はやはり林業（＝技官の技術力）である。森林の管理には手入れが不可欠だという事や収入確保の面からもそれがいえる。

演習林を「時計」に例えるとこの部分は電池にあたる。電池を交換し続ける必要があると同じように、森の手入れもまた続けなければならない。

○教育支援、対外アピール　＝表の顔／文字盤、時間を示す針

もうひとつの柱は教育支援。学生実習を含めた利用者へのサービスと技術力の向上。対外的にアピールできる森づくりを実践することも演習林の表の顔である。近年力を注いでいる環境教育事業も同様である。

これは時計の表面の文字盤にあたる。美しく機能的なデザインが顧客や市民にアピールすることになる。

○森林計画、データの蓄積　＝仲をとりもつ歯車／駆動部分

上記の二つをつなぐのが森林計画である。どこにどんな森をどうやってつくるのかという構想が不可欠。表の顔につながる各種データの収集、蓄積もここに含まれる。そしてこれを実行する体制をとれなければ意味がない。

この駆動部分が欠けていては時計は正確には動かない。電力が文字盤に伝わらない。

これらの3点が一体になったものが演習林業務の全体像だと考える。

5. 夢の森づくり（将来構想・私案）

あと数年で次期の演習林管理計画がスタートするが、どんな施業方針のもとにこういった森林をデザインすればいいのだろうか。答えの一つとして「小面積モザイク林（＝複相林）施業」を提案する。1回の皆伐面積をなるべく小さく分散させたり意識的に自然林を残す、立地級の低い場所には再造林しないなどして、森林のもつさまざまな機能を発揮するためのいろいろなタイプの小さな森が集まった森林を造成する施業方法である。研究目的をもって行う森林管理（皆伐や間伐）を結果的に収入に結びつけることができると考える。

【ほかに…】

- ・緑の回廊づくり…野生生物の生息地である森林を地理的に分断させずに自然林でつなげる森づくり。国有林では始まっているが具体的な施業方法は模索中。
- ・楽しむための川辺林（溪畔林）施業…魚のエサになる昆虫を養う落ち葉、鳥がとまれる枝。これらを確保するために川の兩岸数十mは自然林に。さらにムベ、アケビ、イヌビワ、ヤマモモ、キイチゴなどの食べられる木の実を川辺に成林させる。環境教育のお楽しみに。

6. まとめ

演習林の歴史－100年近く－の先人達の尽力のおかげで森林の蓄積は充実してきた。この財産をこれからいかに運営していくのか、今回の考察を業務に活かしていきたい。